

Title	吐魯番出土文物研究会会報 第79号
Author(s)	
Citation	吐魯番出土文物研究会会報. 79 p.1-p.6
Issue Date	1992-08-01
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78890
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

吐魯番出土文物研究会会報

第79号

1992年8月1日
吐魯番出土文物研究会

目次

〈論 説〉唐代駅伝制度の構造とその運用（Ⅰ）	荒川 正晴	1
〈会員の研究成果（1991年8月～1992年7月）〉		4
〈『吐魯番出土文物研究会会報』（第67号～第79号）総目次〉		5
〈会 告〉		6

唐代駅伝制度の構造とその運用（Ⅰ）

荒川 正晴

はじめに

唐代の駅伝制度は律令に規定された公営の交通システムであり、基本的に駅馬と伝馬とによって運用された。この制度についてはこれまでに少なからざる研究の蓄積があり、とりわけ最近では吐魯番出土文書を利用して、駅や館といった交通施設の運営の実態に関して詳細な検討が進められている。ところがこれまでの研究は、主として駅以下の交通施設やそれに配置された駅馬の運用面の解明に留まっており、意外にも、運用の根幹となる駅馬や伝馬が如何なる性格の馬で、両者がどのように連携して唐代の公用交通を支えていたのかという基本的な点については、検討を深めるに至っていないのが現状である。これは史料的な制約によるところが大きいですが、唐代の駅伝制度の全体像が今もって曖昧なのは、何よりもこうした基本的な問題が未だ十分には解明されておらず、共通の認識を得るまでに至っていないからである。

先に筆者は、唐朝の支配と中央アジア地域、とくにパミール以東の天山南北地域（以下、中央アジア地域と便宜上呼ぶ）の社会との関係を考えるための基礎作業の一環として、当地域の交通システムの問題を取り上げたことがあった。そのなかで唐代の駅伝制度がどのようなかたちで河西および中央アジア地域に導入されていたのかを論じ、河西地域では駅馬と伝馬が、それぞれ駅と伝馬坊とによって運用されていたのに対し、それ以西の中央アジア地域では伝馬坊は導入されず、これに代わって長行馬とそれを管理する長行坊という独自の機関が設置されていたことを指摘した⁽¹⁾。しかしながら駅の設置は河西地域以西にも認められるので、長行坊制度が生み出された背景を論ずるためには、唐朝が制定した駅伝制度の構造を明らかにし、その上で何故伝馬坊に代わって長行坊が設置されたのかを、中央アジア地域における交通システムの伝統と絡めて分析する必要がある。本稿では、こうした立場から、これまで曖昧にされてきた唐代の駅馬と伝馬との関係の解明に重点を置きながら、唐代律令体制下における駅伝制度の構造と運用について私見を述べておきたいと思う。

【註】

(1) 荒川A。

一 駅伝制度研究の現状と問題点

唐代の駅伝制度に関する先駆的な研究として、今から半世紀以上も前に公表された坂本太郎・陳沅遠両氏の論稿を挙げることができる⁽¹⁾。坂本氏は日本古代の駅制との比較で唐代のそれを付随的に論じられているが、陳氏は関連史料を渉猟して唐代における駅の組織や管理、さらにそれを利用する駅使について詳細に論究された。その後青山定雄氏は、両氏を研究を継承しつつ、両氏がほとんど論及されなかった駅馬と伝馬の使用上の区別や、玄宗時代以降における駅制の変遷の具体的な状況について明確にされた⁽²⁾。これまでのところ、日本においては、この青山氏の研究に対する批判は見られず、日本における唐代駅伝制度研究の現段階での到達点となっている。一方、中国（台湾を含む）では、陳氏以後も、嚴耕望氏の『唐代交通図考』のような研究書をはじめ、唐代を含む中国歴代の交通制度に関する史料集や概説書が数多く公表されている⁽³⁾。また最近では冒頭でも述べたように、新たに吐魯番文書が出土した結果、これらの出土文書を利用した駅伝制度研究が進められており、駅のみならず、駅と同様に公使に対して宿泊や飲食などを供給する機能をもっていた吐魯番の館についても、その運用の実状が明らかにされつつある⁽⁴⁾。ただしこうした研究の蓄積を有しながらも、後に述べる王冀青氏の論稿を除き、そのほとんどは先の陳・青山両氏の論稿を取り上げて検討するところがなく、したがって両氏の研究成果を深化させるには至っていない。実はこうした研究状況が、これまで唐代の駅伝制度に対する研究を、主として駅以下の交通施設やそれに配置される駅馬の運用面に対する分析に留まらせている大きな原因なのである。

前述したごとく駅伝制度とは駅馬ばかりでなく、これと併せて伝馬も運用される公営の交通システムであった。もちろん陳・青山両氏ともこの伝馬について論及されており、特に青山氏は駅には駅馬とともに伝馬も配置されていたことを指摘されている⁽⁵⁾。青山氏のこの見解は、律令に規定される駅に対する駅田支給の規定において、駅馬とともに伝馬も田畝の支給対象馬にされていたという点に基づいている。すなわち伝馬も駅馬とともに駅に付随して機能した公用交通馬であるとされるのである。また併置されるからには、両者がその機能を異にしていたことが当然想定されるのだが、この点についても、青山氏は次のように理解されている⁽⁶⁾。（一）駅馬は緊急を要する場合の交通・通信手段として利用されたのに対し、伝馬は基本的には緊急を要さない常行の交通手段として利用されていた。（二）これは、駅馬が騎乗するために概して速力が速いのに対し、伝馬は多く伝車とともに用いられることにより、駅馬よりも速力が劣るためである。（三）ただし実際の運用にあたっては、利用者の官品の高低も考慮され、緊急時でも品階の高い官吏は車乗による楽な伝馬を多く利用し、反対に品階の低い官吏は通常時でも騎乗する駅馬によることが少なくなかった。

以上のような青山氏の見解は、少なくとも日本では、唐代の駅馬と伝馬に対する理解として定着している。しかしながら青山氏の主張されるように、もし駅馬と伝馬がともに駅に配置されて駅伝制度が運用されていたとすれば、伝馬は単に駅馬の補助手段に過ぎない存在となってしまう。私見によれば、こうした見解に立つ限り、公用交通における伝馬の機能と運用を正確に理解することはできず、結果として駅馬と伝馬とによって運用された駅伝制度の全体像を把握することが困難になる。すなわち駅伝制度の全体像を捉えようとするならば、駅と絡めて伝馬を検討するべきではない。史料的な限界は認めつつも、伝馬の機能と運用は駅と切り離して考察されなければならない、それによって初めて駅制と伝制を正當に位置づけることができるのである。さらにまたそれをふまえ、あらためて駅伝制度の全体的な構造を明確にすることが要求されるのである。

そうした点で、駅伝制度の実態を伝える敦煌・吐魯番出土の文書史料に基づき、伝馬の有する機能と運用に新たな視点を提示された王冀青氏の論稿は注目される⁽⁷⁾。王氏は既に伝馬について以下のように指摘されている。（一）駅馬が駅に備えられるのに対し、伝馬とは馬坊によって管理されるもので、この馬坊は州や県の治所に設置された。（二）また伝馬の性格として、第一に青山氏が指摘されるような車乗に使用されるものではないこと、第二に通常の官員の交通および通信に利用されるとともに物資輸送にも充てられていたこと、第三に駅馬と異なり、必ずしも途中馬を交換せずに長途の

伝送に従事したこと、第四に吐魯番文書などに見える長行馬と同一の性格と機能をもつことなどを挙げられた。

王氏の論稿が敦煌・吐魯番文書の分析を通して、駅馬と伝馬の具体的な運用状況を明らかにし、駅伝制度研究を飛躍的に進展させたのは事実であるが、文書史料を駅伝制度研究に有効に活用してゆくためには、先ず根幹となる駅伝制度の制度としての内容を十分に把握するとともに、それが施行された地域それぞれの政治・社会状況を明確にしつつ、文書の分析作業を進めてゆかねばならない。これは文書史料、とくに中国内地の制度に関わる文書を検討する際の前提になるが、この点において、筆者は王氏の伝馬に関する指摘が大綱において容認されることを確認しつつも、(二)の第四に挙げた伝馬を長行馬と同一視する見解に与することはできない。また(一)の主張についても、これが駅伝制度一般にどれほど普遍化できるのか、という疑問がある⁽⁸⁾。これは駅伝制度の構造とも密接に関わる問題であり、あらためて検討する必要があるだろう。

そこで以下に、先ず駅馬と伝馬についてそれぞれの機能とその運用の実態を究明し、それをふまえて唐代の駅伝制度の構造について検討したい。

(続)

【註】

- (1) 坂本太郎『上代駅制の研究』(至文堂、一九二八年〈『坂本太郎著作集』第八巻・古代の駅と道 吉川弘文館、一九八九年、所収)、陳沅遠「唐代駅制考」(『史学年報』第五期、一九三三年)。
- (2) 青山定雄「唐代の駅と郵及び進奏院」(青山、第一篇第三章)。
- (3) 姚家積「唐代駅名拾遺」(附函、余大綱)(『禹貢半月刊』第五卷第二期、一九三六年)、白寿彝『中国交通史』(商務印書館、一九三六年〈再刊：河南人民出版社、一九八七年)、陶希聖主編『唐代之交通』(国立北平大学出版組、一九三七年〈再刊：食貨出版社、一九七四年)、樓祖詒『中国郵駅発達史』(中華書局、一九四〇年)第三章第二節「唐駅研究」、同氏『中国郵駅史料』(人民郵電出版社、一九五八年)、嚴耕望『唐代交通図考』全五巻(中央研究院歴史語言研究所、一九八五～一九八六年)、劉広生主編『中国古代郵駅史』(人民郵電出版社、一九八六年)第六章「隋唐的郵駅」、および劉希為『隋唐交通』(新文豊出版公司、一九九二年)などがある。
- (4) 魯才全「唐代前期西州寧戎駅及其有關問題－吐魯番所出館駅文書研究之一－」(唐長孺主編『敦煌吐魯番文書初探』武漢大学出版社、一九八三年)、同氏「唐代的“駅家”和“館家”試釈」(『魏晉南北朝隋唐史資料』第六期、一九八四年)、王A・B、王宏治「關於唐初館駅制的幾個問題」(北京大学中国中古史研究中心編『敦煌吐魯番文献研究論集』第三輯 北京大学出版社、一九八六年)、および吳麗娛・張小舟「唐代車坊の研究」(同上)などがある。
- (5) 青山、五二頁。
- (6) 青山、五三～五五頁。
- (7) 王B、五八～六〇頁。
- (8) この点については、既に荒川A、五〇～五一頁においても指摘したが、この時点ではなお先の青山氏の駅伝制度に対する理解を前提としていた。現段階における筆者の駅伝制度に対する見方は、以下に論ずるとおりである。

【引用文献略号】

Maspero ……H. Maspero; Les Documents Chinois, London, 1953.

T T D ……Yamamoto, T. et.; Tun-huang and Turfan Documents concerning social and economic history, I - III, The Toyo Bunko, Tokyo, 1978-1987.

『釈録』……唐耕耦・陸宏基編『敦煌社会經濟文献真蹟釈録』全五輯(全国図書館文献縮微複製中)

心・古佚小説会、一九八六～一九九〇年)

『文書』……国家文物局古文献研究室・新疆維吾爾自治区博物館・武漢大學歴史系編『吐魯番出土文書』全一〇冊(文物出版社、一九八一～一九九一年)

『会報』……吐魯番出土文物研究会編『吐魯番出土文物研究会会報』(吐魯番出土文物研究会、一九八八年～〈第五〇号までについては、同会編『吐魯番出土文物研究情報集録』[中央ユーラシア諸民族の歴史・文化に関する国際共同研究の企画・立案成果報告書 No.2] 梅村坦発行、一九九一年として合冊した頁で示す))

青山……青山定雄『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』(吉川弘文館、一九六三年)

荒川A……荒川正晴「唐河西以西の伝馬坊と長行坊」(『東洋学報』第七〇巻第三・四号、一九八九年)

荒川B……荒川正晴「唐の対西域布帛輸送と客商の活動について」(『東洋学報』第七三巻第三・四号、一九九二年)

王 A……王冀青「唐交通通信用馬的管理」(『敦煌学輯刊』一九八五年第二期)

王 B……王冀青「唐前期西北地区用于交通的驛馬、伝馬和長行馬—敦煌、吐魯番発現的館驛文書考察之二—」(『敦煌学輯刊』一九八六年第二期)

中村A……中村裕一『唐代制勅研究』(汲古書院、一九九一年)

中村B……中村裕一『唐代官文書研究』(中文出版社、一九九一年)

☆

☆

☆

☆

‡ 会員の研究成果 (1991.8～1992.7)

○荒川 正晴

* 「唐の対西域布帛輸送と客商の活動について」『東洋学報』第73巻第3・4号 1992年3月 31～63

* 「要旨：唐代中央アジア地域の交通制度—驛伝制度導入をめぐる問題を中心として—」『唐代史研究会会報』第5号 1992年4月 5～7

* 「敦煌莫高窟」『総解説 古代文明と遺跡の謎』自由国民社 1991年11月 223～225

* (章 瑩訳)「寄語《西域研究》」『西域研究』1991年第4期 1991年12月 125～126

○片山 章雄

* 「吐魯番・敦煌発見の『三国志』写本残巻」『東海史学』第26号 1992年3月 33～42

* 「大谷コレクションが語るもの—佛教東漸52—」『京都新聞』1991年12月30日 朝刊7面

☆再録：『北国新聞』1992年4月11日 夕刊5面／『富山新聞』1992年4月13日 夕刊8面

／京都新聞社編『仏教東漸 シルクロード巡歴』京都新聞社 1992年8月 320～325

* 「鞏州」藤家禮之助編『アジアの歴史』南雲堂 1992年6月 84～87

* (シンポジウム報告 杉山二郎司会／上山大峻・上野アキ・片山章雄)「大谷探検隊90年」『京都新聞』1992年5月2日 朝刊12～13面(発言は13面)

* (章 瑩訳)「期望《西域研究》成為国際性學術刊物」『西域研究』1991年第4期 126～127

* 「要旨：大谷探検隊その後」『あびこシルクロード・サークル十周年記念誌』1992年6月 39～40

○白須 淨眞

* 「トゥルファン古墳群の編年とトゥルファン支配者層の編年—麹氏高昌国の支配者層と西州の在地支配者層—」『東方学』第84輯 1992年7月 111～136

* 「要旨：トゥルファン古墳群の編年とトゥルファン支配者層の編年—麹氏高昌国の支配者層

と西州の在地支配者層－』『東方学』第83輯 1992年1月 168～169

○關尾 史郎

- * 「トゥルファン出土高昌国税制関係文書の基礎的研究－條記文書の古文書学的分析を中心として－」（四）『人文科学研究』（新潟大学人文学部）第81輯 1992年7月 25～63
- * 「「田畝作人文書」小考－トゥルファン出土高昌国身分制関係文書研究序説－」（下）『新潟史学』第27号 1991年10月 66～85
- * 「高昌国の侍郎について－その所属と職掌の検討－」『史林』第74巻第5号 1991年9月 135～150
- * 「「田畝作人文書」の周辺－アスターナー五四号墓出土作人関係文書の分析－」『東アジア－歴史と文化－』（新潟大学東アジア学会）創刊号 1992年6月 100～84
- * 「「章和五（535）年取牛羊供祀帳」の正体－『吐魯番出土文書』割記（七）－」（V），（VI）『史信』第24，27号 1991年12月，1992年5月 1～4，1～4
- * （伊藤敏雄氏と共著）「批評と紹介：侯燦著『高昌樓蘭研究論集』」『東洋学報』第73巻第1・2号 1992年1月 69～77
- * 「要旨：高昌田租試論」『史学雑誌』第100編第12号 1991年12月 102

○町田 隆吉

‡ 『吐魯番出土文物研究会会報』（第67号～第79号）総目次

○第67号（研究特集Ⅰ），1991年9月1日発行

- * 白須淨眞「唐代の折衝府の等級と西州の折衝府の等級に関する覚書－編纂資料と出土文書の相互補完を求めて－」（1）
- * 「【紹介】中国吐魯番学学会『吐魯番学著作論文資料目録』」

○第68号（研究特集Ⅱ），1991年9月15日発行

- * 白須淨眞「唐代の折衝府の等級と西州の折衝府の等級に関する覚書－編纂資料と出土文書の相互補完を求めて－」（2）
- * 白須淨眞「【資料紹介】ベルリンの花祭り－大谷探検隊員・蘭田宗恵に関する写真資料－」

○第69号（研究特集Ⅲ），1991年10月1日発行

- * 白須淨眞「唐代の折衝府の等級と西州の折衝府の等級に関する覚書－編纂資料と出土文書の相互補完を求めて－」（3・完）
- * 「渡辺哲信のペンネームについて」

○第70号（南疆遺跡参観号），1991年11月1日発行

- * 荒川正晴「南疆遺跡参観報告」（1）

○第71号（特集・第5回大会），1991年12月1日発行

- * 活動記録
- * 発表要旨
 - 片山章雄「李柏文書の基礎的観察と諸問題」／白須淨眞「唐代の折衝府の等級と西州の折衝府に関する覚書－編纂資料と出土文書の相互補完を求めて－」／關尾史郎「高昌田租試論－二系列の田租を論じて土地制度に及ぶ－」／町田隆吉「麹氏高昌国時代の寺院経済文書について」
- * 關尾史郎「高昌「田畝（得・出）銀錢帳」について－『吐魯番出土文書』割記（一〇）－」（下・完）

○第72号，1992年1月1日発行

- * 王 素／關尾史郎訳「トゥルファン出土「某氏殘族譜」初探」（Ⅰ）

○第73号, 1992年2月1日発行

* 王 素／關尾史郎訳「トゥルファン出土「某氏殘族譜」初探」(Ⅱ)

* 王素先生略歴

* 王素先生著作目録

○第74号, 1992年3月1日発行

* 關尾史郎編「吐魯番出土文物關係論著目録(稿) - 1989・中文篇 -」

* 王 素／荒川正晴訳「【紹介】『吐魯番出土文書』図版釈文対照本・第一冊」

○第75号, 1992年4月1日発行

* 王 素／關尾史郎訳「トゥルファン出土「某氏殘族譜」初探」(Ⅲ)

* (關尾)「【紹介】楊際平著『敦煌吐魯番出土文書研究 均田制新探』」

○第76号, 1992年5月1日発行

* 王 素／關尾史郎訳「トゥルファン出土「某氏殘族譜」初探」(Ⅳ・完)

* (關尾)「【紹介】凍国棟著『唐代的商品經濟与經營管理』」

○第77号, 1992年6月1日発行

* 榮新江著／青木 茂・關尾史郎訳注「吐魯番の歴史と文化」(Ⅶ・完)

* (關尾)「【覚書】有鄰館名品展に出品された長行馬關係文書について」

○第78号, 1992年7月1日発行

* 1990年中文論著紹介

侯燦「解放後新出吐魯番墓誌録」／吐魯番地区文管所(柳洪亮執筆)「吐魯番采坎古墓群
清理簡報」／劉漢東「關於吐魯番出土文書中五涼時期的徭役問題」／郁越祖「高昌王國政
区建置考」／劉戈「關於麴伯雅年号問題」／錢伯泉「從祀部文書看高昌麴氏王朝時期的祆
教及粟特九姓胡人」

○第79号, 1992年8月1日発行

* 荒川正晴「唐代駅伝制度の構造とその運用」(Ⅰ)

* 会員の研究成果(1991年8月～1992年7月)

* 『吐魯番出土文物研究会会報』(第67号～第79号)総目次

* 会告

‡ 会 告 (吐魯番出土文物研究会 1992年8月1日)

吐魯番出土文物研究会は1987年に結成以来、夏季休暇を利用して五名の会員が毎年8月に京都に集まり、大会を開催してまいりましたが、昨年に引き続き事務局の荒川正晴会員が調査のため、7月から9月にかけて約二か月間中国に出張することになりました。そのため昨年と同じように、他の四名の会員だけで大会を開催すべく日程の調整に努力してきましたが、種々の理由で都合がつかず、まことに残念ではありますが、本年は夏季休暇の期間内における大会の開催を断念することになりました。例年大会の開催に際して暖かいご支援を賜わった会外の方々にも、ここにご報告する次第です。今後の予定についてはあらためて会員で相談する予定でありますが、とりあえず本会報に関しましては、本年1月以来の月刊、各号6～8ページというペースによって発行してゆく予定であります。引き続きご支援の程、よろしくお願い致します。

事務局(連絡先) 〒182 東京都調布市国領町5-19-14

荒 川 正 晴 方

TEL 0424(81)4633

吐魯番出土文物研究会 (The Research Society for Turfan Relics)